

# 昔話・童話は口承文学

想像の世界に生き、その中で学ぼうとする

3歳から9歳まで  
とりわけ7歳

昔話・童話の適齢期

昔話や童話は、昔から語りによって伝えられてきた「口承文学」です。

絵本がなかった時代、子どもたちは、大人が語る昔話を聞き、想像をふくらませながら、登場人物の言動からいろいろなことを学んだことでしょう。

こうした昔話・童話の語りで多くを学ぶのは、3歳から9歳ごろまでの間で、特に7歳が適齢と言われています。

# 物語を読む

日常生活やこれから体験するであろう人生のことからを経験できる。



「生き方を学ぶ」  
「未来の人生への準備」

子どもたちは、字が読めるようになると、自ら物語を読むようになります。そして、登場人物と一緒に物語の世界を冒険します。

子どもたちが読む物語は、多種多様ですが、日常生活やこれから起きるかもしれない人生のことからを疑似体験できます。

「物語を読む」ということは、「生き方を学ぶ」ことでもあります。「未来の人生への準備」をしているとも言えるのです。

「物語」には子どもたちをその世界へいざなういろいろな工夫がされています。

## おおきなかぶ

からいからい、  
おおきなおおきなかぶ

からいからい、  
ちいさなちいさなかぶ

あまいあまい、  
ちいさなちいさなかぶ

あまいあまい、  
おおきなおおきなかぶ

ロシア民話 西郷竹彦 訳 : 光村図書 小学校1年生国語教科書から本文引用

1年生の国語の教科書に「おおきなかぶ」というロシア民話があります。おじいさんが種をまいたかぶがあまりにも大きくなり、一人では抜けないので、みんなで力を合わせて抜くというお話です。

一人一人が力を合わせるのには、共通の目的が必要です。ここでは、「かぶをぬく」ということですが、そのかぶの説明に工夫があります。

「あまいあまい」と二回くりかえすことであまさを強調します。しかも、「おおきなおおきなかぶ」なのです。

これが、のようなかぶだったら、どうですか？

たとえ大きなかぶでも、一緒に抜きたいとは思えないでしょう。

価値のあるかぶ  
食べてみたいかぶ



絶対ぬきたい



一人ではぬけない



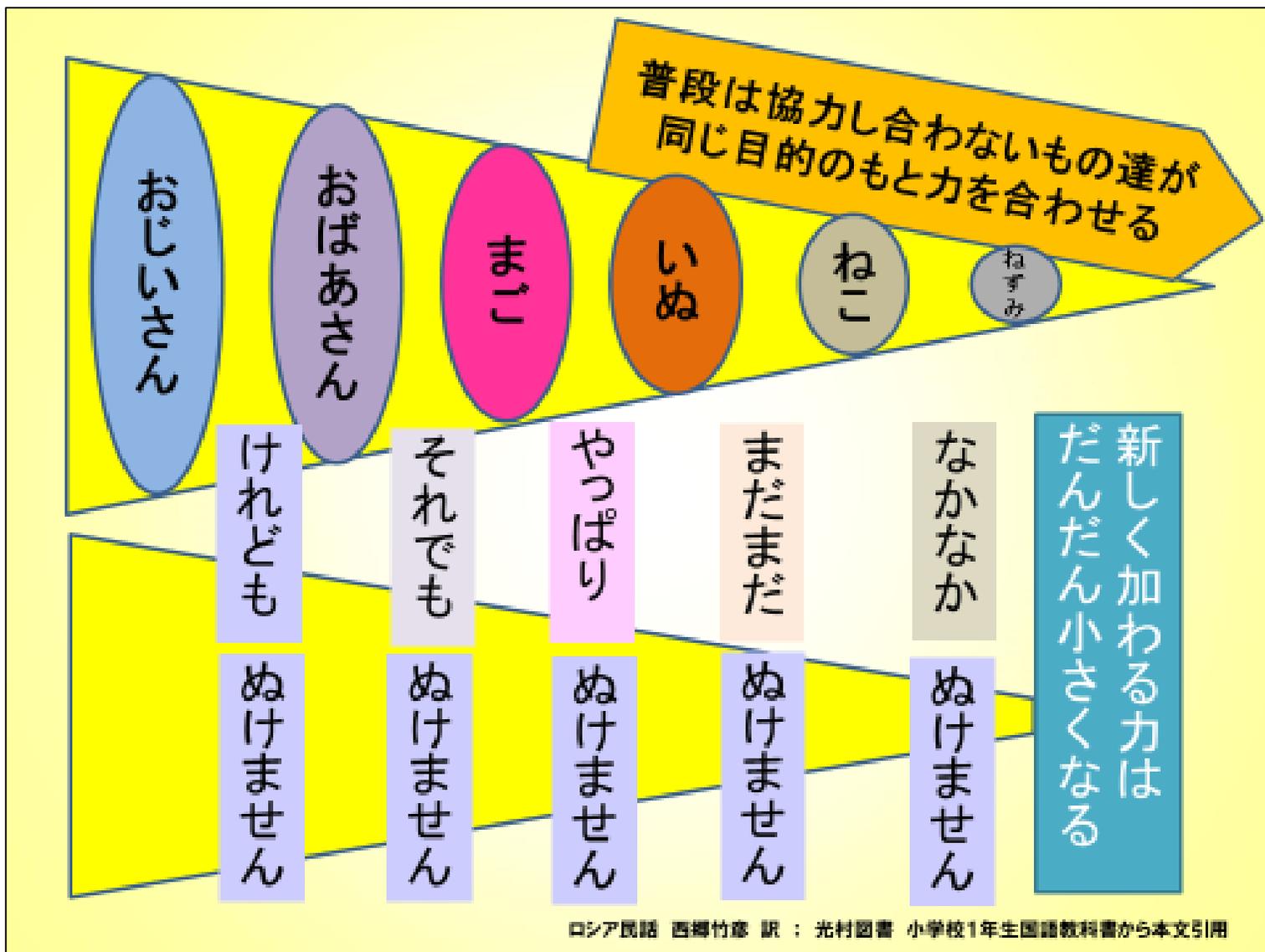
力を合わせてぬく

あまいあまい、  
おおきなおおきなかぶ

ロシア民話 西郷竹彦 訳 : 光村図書 小学校1年生国語教科書から本文引用

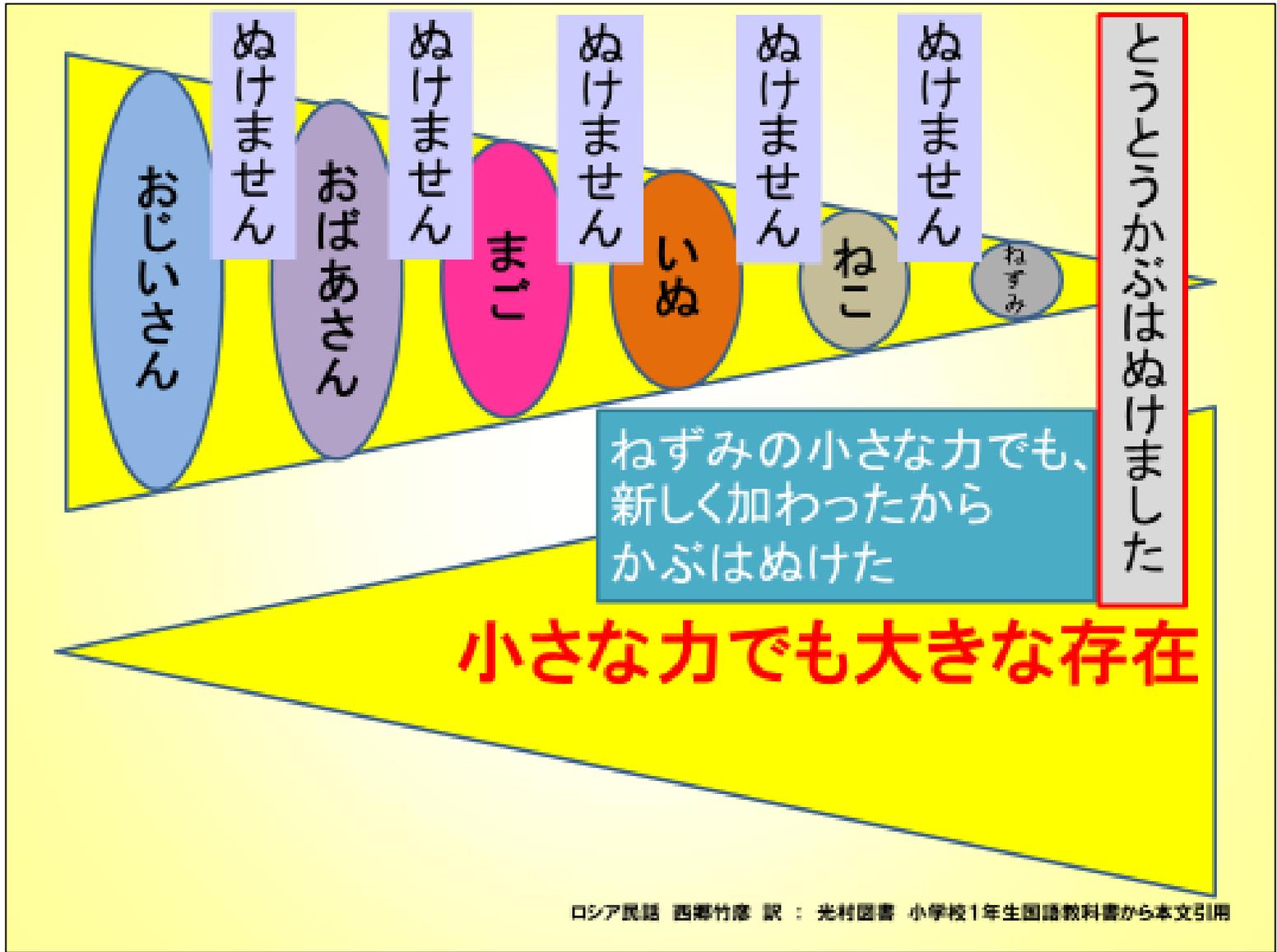
物語の冒頭に、「あまいあまい、おおきなおおきなかぶ」という価値あるかぶであること、たくさんの方が分けて食べることができるかぶであることが書かれています。だからこそ、「絶対にぬきたい」という登場人物の思いに共感できるのです。

そして、おじいさん一人ではぬけないので、他の人に協力をお願いして、力を合わせてぬくことになります。



かぶをぬく順番にも意味があります。最初の「おじいさん」から「ねずみ」まで、力の大きな順番になっています。しかも、「いぬ」が「ねこ」を呼んできて、かぶがぬけないと「ねこ」が「ねずみ」を呼んでくるといふ、普段は敵対視しているものが力を合わせるおもしろさがあります。みんなでかぶをぬいて、一緒に食べたいのでしょうか。

しかし、「ねこ」まで加わっても、かぶはぬけません。新しく加わる力は、どんどん小さくなっていき、本当に抜けるのかどうかあやしくなります。そこに、さらに小さな力しか持っていないねずみの登場です。



ねずみを加えて「うんとこしょ、どっこいしょ。」と引っ張ると、「とうとう、かぶはぬけました。」

今まで、力を合わせてぬいてもぬけなかったことがくりかえされています。しかも、加わるちからは小さくなっていき、本当にぬけるのか心配になります。しかし、「ねずみ」の小さな力が加わることによってかぶがぬけたのです。「ねずみ」という小さな存在でも大きな価値をもっていることが強調されます。

こうした工夫によって子どもたちは物語のおもしろさを味わうのです。

# 読み聞かせのよさ

## 1 安心感・親密感が増す

- 親の肉声
- 肌のぬくもり・におい



親子のコミュニケーション

今は、口伝えでなく、「読み聞かせ」という方法で物語を子どもたちに伝えることが多いようです。

「読み聞かせ」のよさとは何でしょうか。

1つは、親の肉声での読み聞かせであるということです。親の声は、お腹の中にいるときから聞いているので、子どもの安心感や親密感が増します。膝の上や寝る前の布団の中であるなら、間近にぬくもりやにおいを感じます。こうしたことが、親子のコミュニケーションの土台となります。

# 読み聞かせのよさ

## 2 感性豊かになる

- 登場人物の気持ち
- 人生の疑似体験



**真実・善悪・美しさ・価値**

2つめのよさは、感性豊かな子に育つということです。

物語を聞くことによって、登場人物の気持ちに寄り添ったり、反発したりしながら、自分の心が揺れ動く経験をします。また、物語には、真実・善悪・美しさ・価値などが表されていますから、そういったことを追求していく人生を、物語を通して疑似体験できます。そうした経験を通して、感性が揺り動かされ、より豊かな感性を身に付けることができます。

# 読み聞かせのよさ

## 3 想像力を育てる

- 頭の中に映像を浮かべる
- 人物の気持ちを想像する

※計算ができてても文章問題が解けない子

3つ目のよさは、想像力を育てるということです。

読み聞かせは、声からの情報しかありません。子どもたちは、登場人物や周りの様子を頭に思い浮かべる必要があります。

学校では、「頭の中のテレビに映してごらん。」などと呼びかけることもあります。

算数の文章問題を解く際にも、想像力が必要です。「公園に子どもが2人いました。3人やってきました。公園には全部で何人いるでしょう。」これを順番にイメージし、おはじきを動かして解いていくのです。

計算ができてても、算数の文章問題が解けない子は、文章に書いてあるとおりに想像しにくいのかもかもしれません。

# 読み聞かせのよさ

## 4 語彙力を育てる

- 言葉の意味
- 表現の仕方



理解力・表現力の基礎

4つ目は、子どもの語彙力を育てるということです。

物語には、いろいろな言葉が出てきます。例えば、「わらぶき屋根」のように、今ではまわりで見当たらない物の名前が出てくることもあります。子どもが知らない言葉も次々出ています。慣用句や比喩なども使われます。

そうした一つ一つの言葉の意味や表現の仕方を理解することの積み重ねが、子どもの語らい力を広げ、理解力・表現力の基礎を培っていくのです。

## 読み聞かせのよさ

### 5 集中力を育てる

- 消えてしまう言葉

子どもの反応を見て  
子どものペースに合わせる

最後のよさは、集中力を育てるということです。

読み聞かせの情報は、声のみですから、語り手が発したとたんに消えてしまいます。ですから、子どもは、集中して聞かざるを得ません。

そのため、読み聞かせをするときは、子どもがお話についてこれているかどうか反応を見て、子どものペースに合わせる大切が必要です。

## 親子で共有する大切な時間

- 読み聞かせ週間
- 絵本ふれあいタイム
- おひざで読み聞かせ
- 抱っこ読書
- 親子読書



現在、多くの園や学校で読み聞かせが行われています。

保護者が園や学校を訪れ、子どもたちに読み聞かせをしているところもあります。

読み聞かせをしているときは、親と子が同じ時間を共有しています。それは、互いの人生の中で、とても幸せなひとときです。

ぜひ、子どもたちが読み聞かせを楽しみにしている時期を大切にして、家庭でも取り組んでみましょう。